



2023年度、オギジビ文庫では「こどものとも年少版」と「かがくのとも」を定期購読していました。毎月、乗り物、動物、食べ物、虫など、さまざまなものをテーマにした絵本が届いていましたが、皆さん興味を持った絵本はありましたか？

今年度の絵本リストはひとこと感想文と共にポスターにして、診察室前の廊下に貼ってあります。そちらもぜひご覧いただき、気になる絵本があれば、オギジビ文庫で探してみてくださいね。

## 「たくさんのふしぎ」



オギジビ文庫とは別に、個人で「たくさんのふしぎ」を購読していました。毎号その分野の研究者や専門家が執筆しているので、内容がとても充実しています。対象は"小学3年生から"となっていますが「"ふしぎ"を知ると、世界が変わる！」というコンセプトどおり、濃密な内容を分かりやすく知ることができるので、大人が読んでも知的好奇心がくすぐられる本だと思います。

いくつかご紹介したいと思います。1冊目は11月号「ロンドンに建ったガラスの宮殿 最初の万国博覧会」です。



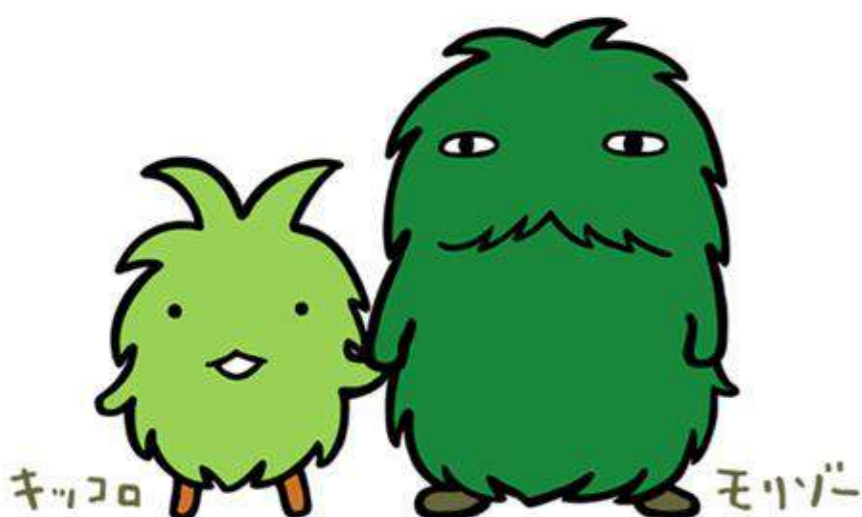
皆さんは万博に行ったことがありますか？私は2005年に愛知県の長久手で開催された「愛・地球博」に行きました。8月、世の中が夏休みの期間に行ったので、ものすごく暑く混んでいて、遠目から一瞬冷凍マンモスを見た、偶然行われていた辛島美登里のコンサートがとても良かった、という思い出です。



「愛・地球博」から遡ること約150年、世界初の国際博覧会は1851年に開催された「ロンドン万国博覧会」でした。このロンドン万博の開催を推進

した中心人物が、絵本の主人公の一人であるアルバート公です。アルバート公はエリザベス2世の高祖母(ひいひいおばあさん)である、ヴィクトリア女王の夫です。絵本のタイトルにあるガラスの宮殿、「クリスタル・パレス

(水晶宮)」はもう一人の主人公、庭師パクストンが設計したロンドン万博の会場の名前です。クリスタル・パレスと聞いて最初にぱっと思い浮かんだものは、ディズニーランドのレストランでした。レストランについてネットで検索をすると「ヴィクトリア朝風のガラスのドームが特徴のビュッフェレストラン」と紹介されていました。きっと、水晶宮をイメージして造られたものなのでしょう。



未だ行ったことはないのですが、「世界初の万博の会場をイメージしている」という目線で見ると、また違った気持ちで楽しめそうです。

さて、ロンドン万博が開催された頃のイギリスは、18世紀後半から19世紀はじめにかけての産業革命を経て、世界の工場と言われるほど高い競争力を持っていました。当時はインド、オーストラリア、カナダなどを植民地支配するなど、国に勢いはありましたが貧富の差も大きかった時代のようなようです。絵本では開催決定～設営～開催/展示物の紹介と話が進んでいきますが、それぞれの段階で困難がありました。そのひとつが、会場の建設です。現在、日本では2025年開催に向け準備が進められている大阪・関西万博のシンボルである「リング」の建設費や閉会後の活用について、話題になっています。ロンドン万博でも、建設費の削減や工期の短縮が課題となっていました。そこでパクストンが取り入れたのがプレハブ工法だったそうです。会場建設のもう一つの課題が、会場予定地のハイドパークにもともとあった榆の木(きつと表紙に描かれた木ですね)を切らずに建てる、ということでした。そこでパクストンは植物(オオオニバス)の構造からアイデアを得て、軽いのに重みを支える強さが得られる骨組みを考え、榆の木を覆うガラスのドームを作ったそうです。カスタネット通信2023年9月号に「ガウディとサグラダ・ファミリア展」のことを書きました。ガウディがグエルというパトロンを得るきっかけとなったのが、1878年のパリ万博に展示するために作成した革手袋のショーケースでした。また、ガウディもサグラダファミリアの柱などの建築に植物の構造を取り入れていました。1冊の絵本が過去の経験や知識と結びつき、新しいことを知ることができるのは面白いなと思いました。



2冊目は10月号「いろいろ色のはじまり」です。クリニックの待合室と診察室に数枚の日本画が飾られていますが、ご覧になりましたか。私たちは絵を描くときに色鉛筆、クレヨン、水彩絵の具などを使いますが、日本画は「岩絵の具」を使うそうです。「岩絵の具」はその名の通り天然の石を砕いて作ります。そのサラサラの砂をどうやって絵の具にするのか？院長に教えてもらい“絵を描き始めるまでに時間かかるな”と思っていたところ、タイムリーに届いたのがこの絵本でした。絵画に使う岩絵の具などの「顔料」だけでなく、糸や布を染める「染料」の原料についての話も出てきます。

「蓼食う虫も好き好き」、「紺屋の白袴」などのことわざの由来や、“紫は高貴な色”であった歴史を考えると、人々の生活は大昔から「色」と強く結びついてきたのだなと感じました。日の丸の旗はもとはアカネで染めていた、ナポレオンの死因は緑色の絵の具として使用したヒ素中毒かもしれない、など興味深い話も出てきます。色の話といえば、この原稿を書いている時点ではまだ手元にないのですが、3月号は「かっこのいいピンクをさがしに」です。どんな話か楽しみです。

2023年度の「たぐさんのふしぎ」のラインナップを振り返ると、5月号の「種から布をつくる」にも草木染のはなしが出てきました。9月号は「「植物」をやめた植物たち」でした。異なる視点からの話なのに、つながりがあるところが面白いですね。「たぐさんのふしぎ」は2021年4月号からST室にあります。福音館書店のホームページからバックナンバー検索ができるので、読んでみたい本があればお声がけください。また、2024年度はオギジビ文庫で「たぐさんのふしぎ」を購読予定です。どうぞお楽しみに。